

第3回ライブニッツ研究会発表要旨

ライブニッツにおける神の正義の観念 —悪の容認の問題を手引きに—

長綱 啓典 (学習院大学)

神はその全知によって諸々の悪いはたらきを予見する。そして、その全能によって悪いはたらきを妨げることができるのに、神はそれらの悪いはたらきを「容認」(permettre)する。その結果、この世界の中に、様々な悪が生じる。ここから、神に対して不正義という非難が浴びせられることになる。

このような非難に対して、ライブニッツは、神による悪の容認と神の「正義」(justice)とは両立可能であるという立場を取る。では、悪の容認の問題において弁護されるべき神の正義とはどのようなものなのであろうか。また、悪の容認と神の正義とはどのようにして両立しうるのであろうか。

いわゆる正義の恣意的見解は「神が或るものを意志するがゆえに、その或るものは正しいのだ」と考える。この立場は正義の形相的理由を「意志」(volonté)と「能力」(puissance)との結び付きのうちに認めるのである。それはまた神の「権利」(droit)を強調する立場でもある。これに対して、ライブニッツは「或るものが正しいがゆえに、神はその或るものを意志するのだ」と考える。つまり、正義の形相的理由を「意志」と「知性」(entendement)との結び付きのうちに認めるのだ。それゆえ、ライブニッツにおける正義概念の独自性は知性というファクターに求められよう。

では、悪の容認の問題において、この知性のファクターはどこに示されているのであろうか。ライブニッツによると、神の「先行的意志」(volonté antécédente)は個々の善を対象とする。これに対して、神の「帰結的意志」(volonté conséquente)の対象は全体としての善、つまり最善である。まさにこの帰結的意志の次元において、正義の本質的要素である知恵のファクターが抽出される。なぜなら、最善選択のプロセスにおいて、複数の可能の間で選別をし、それらのうちから最善を決定するのは、他ならぬ神の知恵の役割だからである。こうして、神による悪の容認と神の正義とが両立せしめられるのである。

ところで、ライブニッツによれば、罪が容認の対象となるのは、その罪が「不可欠の義務」(devoir indispensable)からの帰結とみなされるかぎりでのことである。神は最善律を侵犯するという義務違反を犯すことなしには、人間の犯罪を妨げることができない。これは神性の破壊である。それゆえ、神は被造物の道徳的悪を容認するよう義務づけられているのだ。ライブニッツは、神がこのように義務に従う神であってはじめて、精神的被造物のうちに神への「純粹愛」(pur amour)が生じうると考えているようである。したがって、この「義務に従う神」という神観において、正義の恣意的見解—神の「権利」を強調する立場—に対する批判が真に完遂されるのだとみなし

うるであろう。